

善化寺（山西省大同市）の伽藍構成について

― 華嚴と密教が融合した一形態として ―

遠 藤 純 祐

善化寺（山西省大同市）の伽藍構成について

— 華嚴と密教が融合した一形態として —

遠藤 純 祐

はじめに

善化寺は山西省大同市旧市街（城内）の南西部に在る古刹である。

大同市は、その郊外に雲岡石窟を控え、市内には美しく整備された古刹、上華嚴寺、下華嚴寺が有り、門前町の再開発と相俟って、両者が観光客の興味を著しく惹くが、善化寺は知名度が低く、またその現状の山容からしても、十分に顧みられていない様子であった。

しかし、具に境内を眺めてみるなら、善化寺は遼・金代の建築群により構成されており、それらの規模、また重厚にして壮麗なる様は決して両華嚴寺に見劣りするものではない。山西省には中国最古（唐代）の木造建築物とされる南禅寺大殿をはじめとして、多くの歴史的木造建築が保存されているが、多くの場合にそれらは単体で残されているにすぎず、善化寺のように境内がひとまとまりで古建築である例は極めて稀で、その意味からも極めて重要な文化財であると評されている。実際、中華人民共和国国務院は第一批全国重点文物保护单位（一九六

一年三月四日）に於て、善化寺を故宮（北京市）・万里長城（北京市）・白馬寺（河南省洛陽市）・大雁塔（陝西省西安市）等の七十六ヶ所と共に「古建筑及歴史紀念建築物」の分野から全国重点文物保護單位に指定している。全国重点文物保護單位はこれまで五度ばかり公布されているが、第二批全国重点文物保護單位の公布は一九八二年二月二十四日のことであり、先の公布から二十年余りも隔たつておれば、善化寺の価値が如何に早くより公式に認知されたかを容易に察することができよう。

筆者が善化寺を訪れたのは、三年ほど前のことであるが、当時既に修復工事は一応に完了したとのことで、目立った損壊は認められなかったものの、必ずしも十全といった印象を受けなかった。善化寺は歴史的価値に見合っただけの保護を受けておらず、誠に残念なことだと言わねばなるまい。

ここで一応に留意しておかねばならないのは、国家的にも認められた善化寺の歴史的価値とは建築物としてのそれであり、仏教という内実を一旦排した、所謂「容れ物」に対しての評価であるという点である。勿論、その歴史的価値は単純に建築史の分野に⁴⁾置かれるということではないだろう。しかし、「大金西京大普恩寺重修大殿記」によれば、「大金西都普恩寺は、古より号して大蘭若としてゐる」とあり、善化寺（普恩寺）は古くから大寺院であつたとされながら、これまで仏教史研究の場面で殆ど言及されることはなかった。恐らくは、歴史的な名僧や特定の宗派といったものとの関係が希薄であつたということに起因するのであろう。実際、管見の及ぶ範囲で言うなら、仏教史書にさえ善化寺に注意を払つた痕跡を見出すことができない。若しこのことが逆に、善化寺に何か記載すべき特別な性格を見出しえないといった、いわば他にも通用するような特色の無さを示唆しているものと捉え直すなら、遼・金代より良好に保存されてきた善化寺の境内から、当時の仏教の動向、しかもある程度の一般的傾向の端緒を窺うことも期待できることにならう。

本論ではさしあたって先ず、現存する善化寺の伽藍及び尊像の配置について仏教思想史の観点から考察することにより、善化寺の設計思想を探り、仏教思想史に於ける資料として善化寺の再評価を試みることにしたい。

善化寺の歴史

善化寺の歴史は、先にも述べたように大正大藏經史伝部所収の仏教史書に一切記録されておらず、また正史にも殆どその痕跡を尋ねることができない⁽¹⁾。他の文献には、僅かに『山西通志』『大同府志』等といった地方誌に於て簡略に示されているにすぎない。しかし、その記事も善化寺の境内に保存されている石碑に示された内容を超えるものではないので、ここでは碑文を手がかりに善化寺の清代までの歴史を概観してみることにしよう。

善化寺に残る石碑は次の如きである。

- A 大金西京大普恩寺重修大殿記 大定十六年八月一日（西曆一一七六）
 - B 重修善化寺記 萬歷十一年三月既望（西曆一五八三）
 - C 重修善化寺碑記 乾隆五年季夏（西曆一七四〇）
- これら三基の石碑は前よりA金代、B明代、C清代の建立であり、「大金西京大普恩寺重修大殿記」が最古のものとなる。

それぞれ善化寺の修復・再興を記念して建立されたもので、後のものは以前の歴史について触れてはいるものの、それぞれが当時の修復事業を主な内容としており、また必ずや先の碑文を参照していることであろうから、互いに対校資料として用いることができず、批判的に歴史を検討することができない。しかし、これらの碑文以外に史料が残されていないという事情の元では、もはやそれらに依拠する以外、解明の端緒を求めることはでき

ないだろう。それでも、各々が主眼とする修復事業に関する記事については、それぞれの筆者が目視した事柄が記されているのであり、また当時 に於て伝聞された内容が歴史として盛り込まれているということであれば、それらの記事はある程度信用することができると考えられるのであり、三種の碑文を時系列順に再構成することにより、善化寺の歴史の概要が伺われてくるものと考ええる。

一 開元寺から普恩寺への改名

A 碑

按寺建於唐明皇時。與道觀皆賜開元之號。而寺獨易名。不見其所。自今樓有銅鐘。其上款識。乃是清泰三年。年在丙申。所鑄造也。其易今名。當在石晉之初。或唐亡以後。第未究其所易之因耳。

B 碑

善化寺居城之南坊。地址宏闊。規制整肅。其始建於唐玄宗開元間。匾爲開元寺。有銅鐘誌。後唐廢帝。清泰三年。丙申年鑄。弗記何年。毀其鐘而易其名大普恩寺。

C 碑

始於唐玄宗開元年間。名之曰開元寺。其後傳之久。更其名曰大普恩寺。

善化寺の歴史は、唐代にまで遡ることができるという。寺は元々、「開元寺」と称したらしい。しかし、碑文にはそのように言われる根拠が見当たらず、恐らくは伝聞によるものとも考えられる。

ここで言う「開元寺」は『唐會要』卷四十八の「天授元年十月二十九日。兩京及天下諸州。各置大雲寺一所。至開元二十六年六月一日。並改爲開元寺。」と言う所の「開元寺」と解される。正史では開元寺が天下に置かれ

る経緯について述べられてはいないのであるが、『舊唐書』卷九・本紀第九・玄宗下に「（天寶三年）夏四月、南海太守劉巨鱗擊破海賊吳令光、永嘉郡平。敕兩京、天下州郡取官物鑄金銅天尊及佛各一軀、送開元觀、開元寺。」とあり、また同卷二十四・志第四・禮儀四に「（開元二十九年）三載三月、兩京及天下諸郡於開元觀、開元寺、以金銅鑄玄宗等身天尊及佛各一軀。」とあるので、開元寺が各地に建立されたことはまず事実として捉えて問題ないだろう。しかし、何処に何ヶ所、実際に開元寺が設置されたかについては不明であり、果たして山西省の大同にそれが存したかは明瞭でない。

その後、この開元寺は普恩寺に改称される。そのことは鐘樓の鐘誌に「清泰三年。歲在丙申所鑄造」とあり、そこに「普恩寺」の銘が存することから分かるのだから言う。今ではこの鐘誌を見ることができないので、そこに普恩寺の前身が開元寺であったことが明記されていたかを確認することはできないが、A碑で「その今の名を易えたのは、石晋之初に在るべきであり、或いは唐が亡じて以後であり、ただ未だその所易（名をかえられたこと）の因は究めることができない。」とあり、B碑でも「何年にその鐘を毀し、それを易えて大普恩寺と名付けたかについては記されていない。」とあるから、鐘誌に開元寺に関する内容が盛り込まれていたとは考えにくい。改名の合理的理由が、少なくとも金代には分からなくなっていたということ、またその改名も極めて例外的な事例であることが言われておれば、あるいは前身が開元寺であるとする伝承も確実なものとはいえない。それ故に、以上の史料から確実なことを求めるなら、「清泰三年までには普恩寺が存し、金代あたりには、この普恩寺の歴史として、前身が開元寺であったとする伝承が存した」と了するのが適當であろう。

二 遼末の戦災

A 碑

遼末以來。再罹鋒燼。樓閣飛爲埃垓。堂殿聚爲瓦礫。前日棟宇。所僅存者。十不三四。驕兵悍卒。指爲列屯。而喧寂頓殊。掠臧俘獲。紛然錯處。而垢淨俄變。殘僧去之而飲泣。遺黎過之而增歎。

B 碑

遼末時遂罹兵燹。十存三四。

C 碑

迨遼末兵燹。而後不無殘廢。

普恩寺は遼末に戦災に逢ったとされているが、これは『遼史』遼史卷二十九・本紀第二十九・天祚皇帝三の「(保大二年)夏四月辛卯、西南面招討使耶律佛頂降金、雲内、寧邊、東勝等州皆降。阿疏為金兵所擒。金已取西京、沙漠以南部族皆降。」とする記事に呼応する内容である。つまり、遼の敗色が濃厚となった時期、金軍が西京大同府を占拠し、その際の交戦で境内の半分以上が罹災したということである。現存する大雄宝殿と普賢閣は共に遼代の作であると、一致して建築学的に認められているので、これらについては戦禍を免れたということなのであろう。

三 金代に於ける復興

A 碑

閭歷滋久。散亡稍還。於是寺之上首。通玄文慧大師圓滿者。思童戲於畫沙。感宿因於移礎。發勇猛心。得不

退轉。捨衣孟凡二十萬。與其徒合謀協力。化所難化。悟所未悟。開尸羅之壇。闡盧舍之教。以慈爲航。遂其先登之志。以信爲門。咸懷後至之恥。於此時なり。人以須達自期。家用給孤独相勉。咸蘊至願。爭捨所愛。彼髓腦支體。尚無所吝。況百骸外物哉。於是輦幣委珠金。脫袍鬻裘裳者。相系于道。累月逾時。殆無虛日。經始於天會之戊申。落成於皇統之癸亥。

B 碑

金太宗天會六年。僧圓滿重脩。熙宗皇統三年丁巳立石。

C 碑

金太宗天會六年。寺僧圓滿。重脩葺焉。而古刹爲之一新。

遼末に罹災した普恩寺は、金代になって復興された。その工期は、天會六年（一一三八）から皇統三年（一一四三）の間のおよそ十五年間を要したという。

この工事を主導したのは、普恩寺の上首であった通玄文慧大師圓滿だとされている。しかし、この人物を他の文献から確認することは全くできない。但しA碑には「尸羅之壇を開き、盧舍之教を闡じ」とあり、このことからすると、まず戒壇を開きうる資格を有し、また「盧舍之教」に通じた人物であったことが分かる。この「盧舍之教」は、「盧舍那仏之教」と予想され、特に「盧舍那仏之教」と言っている¹⁾りは、その人物の所宗が示唆されているものと解されて宜しいわけであり、盧舍那仏を教義の中心に据える清涼宗（華嚴宗）が先ずもって想起される。しかし、盧舍那仏を中心とする教義を有するものは、必ずしも華嚴に²⁾られるわけではなく、『大日經』等の密教についてもやはり同様であり、予めそれらを除外して考えるべきではないだろう。

普恩寺復興に要した金銭は、主導者たる圓滿の私費のみで賄いきれるものではなく、多くの信者らによって支

出されたことが述べられている。A碑には次の如く復興された境内の様子が克明に描写されており、巨額の工費を要したことは想像に難くない。

凡爲大殿。暨東西朵殿。羅漢洞。文殊普賢閣。及前殿。大門。左右斜廊。合八十餘楹。壁變埏埴。丹腹腹供其繪畫。檼椽梁柱。飾而不侈。階序牖闥。廣而有容。爲諸佛薩埵。而天龍八部。合爪掌園遶。皆選於名筆。爲五百尊者。而待衛供獻。各有儀物。皆塑於善工。胖容莊穆。梵相奇古。慈憫利生之意。若發於眉宇。秘密拔苦之言。若出於舌端。有來瞻仰。莫不欽肅。五體投地。一心同聲。視此幻身。如在龍華會上。百寶光明中。其爲饒益。至矣大矣。不可得而思議矣。

この碑文には、復興された建築物として「大殿」「東西朵殿」「羅漢堂」「文殊・普賢閣」「前殿」「大門」「左右斜廊」が挙げられている。この内「大殿」と「普賢閣」は、現存する建物が遼代の作とされるので、当時の作業では修復にとどまり、それ以外の建物が新たに再建されたものと解して良いだろう。

「文殊閣」は梁思成氏（以下敬称略）の『大同古建築調查報告』に「大雄宝殿前之西、有所謂“西樓”者、巍然矗立、其東尚有遺址、遙相對立、即十余年前罹災之東樓也⁽³⁾」と有り、これは一九三三年に公刊されたものである。およそ一九二〇年あたりに文殊閣は失われたことになる。現在は基台のみが確認され、その規模は普賢閣に等しいので、まさしく対となる形で建立されたものであったのであろう。

「左右斜廊」は既に失われているが、その故址が発見されており、梁思成は「東西廊已毀、僅余一部階基之故址、即圖版十五所示之点綫是已」。又東西廊必依垣而設、今圖中東西垣未成一直綫、与碑文“左右斜廊“合⁽⁴⁾」と述べ、現存する壁に沿って「左右斜廊」が設けられていたと予想し、壁が一直線になっていないことが「斜廊」の言と符合するとしている。

「羅漢堂」については、同書では「羅漢殿与五百尊者、俱無存。依佛寺之配列習慣、羅漢殿不応居東西廊以内。就実状論、亦無容納之余地。疑在其両側、或大雄宝殿迤北⁽⁵⁾一帶。」と述べているが、その言の通り、現状を見る限り更に「羅漢堂」を設置すべき箇所は積極的に想定できない。東西廊にそれぞれ一堂づつ一對設置されたか、或いは大雄宝殿の北にくばくかの余地が存するので、その位置に求めるかとする予想は、消去法により類推されたということなのであろう。先の碑文では、現存する東西配殿には言及されておらず、それは東西に一對、南北軸から言えば、三聖殿と大門の中間に存する建物であるから、羅漢という尊格からすると、山門を入って一番手前の建物ということになるから、その辺りについても「羅漢堂」に適當な箇所として考えても宜しいように思われる。

それ以外の「大殿」（現…大雄宝殿）「東西朵殿」「普賢閣」「前殿」（現…三聖殿）「大門」（現…天王殿）は現在も確認でき、主たる建築物は現存しており、山容は金代より大きく変化していないことが確認される。

四 普恩寺から善化寺への改名

B 碑

國朝正統十年乙丑。僧大用奏請勅。頒藏經及賜今名。用爲習儀之所。建僧綱司於內。設都副綱各一員。以領僧衆。規禁益爲嚴整。僧亦文雅不群。形勢甲於雲中。咸稱勝槩焉。

C 碑

歷明正統十年。僧太用奏請藏經。又爲整飭。爲多官習儀之所。復更其名曰善化寺。
明代の正統十年（一四四五）になると、「普恩寺」は「善化寺」に改称される。B 碑によると、大用なる僧の

奏上により一切経が整備され、また僧官の役所が設置されたということであるから、寺はその地域に於て中心的役割を担うに至ったことが予想される。同碑文では、このような文脈に於いて寺号が下賜された旨が示されており、このことからすると、「善化寺」の寺号は、寺に新たに付与された行政上の指導的役割に由来するものと考えて宜しいだろう。

この行政上の役割を考えるに際して、B碑の「用って習儀之所とし」という一文はC碑の「多官の習儀の所とした」に対応し、この「多官」は、役人一般（在家の役人）を指示しているようにも思われ、僧官以外にも礼部等の官吏が常駐するような寺、或いは役所（官吏養成機関）としての性格が濃厚な寺という姿を想起させる。しかし、B碑ではその前後に「一切経を整備したこと」「僧綱司を内に建てたこと」「都副綱をそれぞれ一員を設けたこと」が示され、そしてその結果として「僧衆を領し、規禁して、ますます厳整をなした」ということであれば、B碑でいう「習儀之所」は僧侶にとつてのそれとして解されるのが適当であり、C碑の「多官」を役人一般として解することは難しい。仮にC碑の表現を尊重するなら、官の中でも僧官に⁴定して考えた方が、B碑との整合性が得られることになるのであろうが、僧官が「多官」と表現されるほど一寺に集まったとも考えにくい。恐らくは、明代のB碑の言う仏教的な「習儀」が、清代のC碑では一般官吏の行うような儀礼の予行演習として解されるに至ったと見るのが宜しいように思われる。

五 明代に於ける善化寺の復興

B碑

歴年已深。舊規漸廢。臺基盡毀。廊廡將頽。於是隣居善士。不欲以千年之古刹。廢於一旦。乃與寺僧謀脩之。

首請於都撫臺永年申公。禁其擾亂。允其脩葺。繼請於鎮守都督永昌郭公。廣運木石。多役工匠。專官以董之。米豆以濟之。自是樂從者衆。貲以爲鄉人勸者則有。代邦國主。特爲厚施。而諸王公繼之。善士致祿輩。寺僧眞性宗綬輩。各有所施。預爲輓瓦土工之費。募緣所得。則日記銀米數多。工力雖博。財可足用。始於萬曆四年。中有水患。九年而告成矣。

C 碑

萬曆崇禎年間亦因之。而規制猶爲可觀。

正統年間に整備された善化寺も、以後一五〇年ほどすると、再び荒廃した。

B 碑によれば、「旧規は次第に廢され」とあり、僧官の配置が次第に廢され、それに伴い善化寺は国家的な援助を望むことができず、経済的に窮していったものと予想される。実際、寺域再興の機運は「隣居の善士」より興り、彼らが「寺僧と謀つてこれを修した」というのであるから、寺院にはもはや主体的に伽藍再建を呼びかけるような人物がもはや存在していなかったことを示唆している。それでも、「都撫台永年申公」「鎮守都督永昌郭公」の庇護の元、民衆から諸王公に至るまで広く寄付を募って工費を賄い、九年を要した一大事業を完成するに至った。

その工期は「萬曆十四年」から九年間ということであるが、B 碑に「大明萬曆十一年春三月 既望立石」とあり、工期と碑文の跋語の時代が前後しているのは、些か奇妙な印象を受ける。しかし、碑文には「碑を記した」ということではなく、「既に万曆十一年には、石碑を立てることを既に望んでいた」ということであり、撰者の「龍門衛儒學訓導雲中張時中」は実際に工事に入る以前の計画の段階から善化寺復興の現場に関わっていて、その段階より「既に石を立てることを望んでいた」と解されるのである。このことからすると、僧俗一致して寺の

再興を發願してから、都撫台永年申公らの許可を取り付ける等といった準備段階に少なくとも三年ほどの時間を要したと推測される。

この工事により、「台基は尽くされ、廊廡は頽そうとしていた」善化寺は「梵宇之制はこれに加えるものは無いのである」と描写されるほどに整備された。その具体的な様子についてB碑は次のように述べている。

大都以堅實久遠爲計。故朴實之務多。藻繪之文鮮。塑像悲甚毀者。不以更粧嚴。非甚陋者不以飾。惟於朽者易之。頽者理之。新其廡壁。甃其臺基。增二亭於臺上。以蔽鍾鼓。易石欄於四周。以壯觀瞻。廊内及臺下之地。悉以甃石砌之。而秀麗之槩。倍蓰於昔。至於改易其牆垣。則體制益峻。開廣其山門。則氣槩愈宏。梵宇之制。無以加此。又樹坊於通衢之外。俾見者咸知所仰焉。諸善人崇佛之心。至矣盡矣。

碑文によれば、その工事は伽藍を新築するというのではなく、破損箇所、或いは経年劣化した箇所の補修復、また「堅実久遠を計とした」ということであるから、躯体構造の補強といった点が主眼になされたようである。つまり、旧来の善化寺の伽藍を基本的に保存する方向での工事がなされたと評することができよう。それでも「二亭を台上に増して鐘鼓を翳し」と有り、境内を囲う壁と一体構造となる鐘樓と鼓樓が、この工事により新たに増設されたものとして認められる。また、「坊を通衢の外に設け」とあり、これは以前の史料に示されていない設備であり、この修復時期に新設されたものか、或いは移設されたものであるかは決することができず、またその遺址が発見されたとの報告も無いので、その設備を善化寺内に如何に位置づけるか明瞭ではないが、これについても新築されたものと考えて良さそうである。僧坊が境内の外に設けられたことにより、僧侶の生活空間と宗教的空間が明確に峻別されることとなり、これは境内に僧坊を持たない現状の善化寺境内の形に沿うものとなっている。

六 清代に於ける善化寺の復興

C 碑

國朝姜變。而後復遭摧折。臺基盡廢。廊廡俱頽。棍徒指爲賭局。頑童視爲戲地。心存之徒源慶。目覩心傷。與本街檀越田見龍胡兆晟等商議。募化衆善。高佩玉等。從康熙四十七年起工。至康熙帝五十五年工止。數年之間。風雨不避。晝夜不辭。勤勞之至。工程告竣。

厥後軍需煩興。造置駱駝鞍屨。廊屋盡被填砌。階級又致損傷。大殿土牆將有□覆之憂。沿及乾隆五年。其徒廣德。從京受戒歸。源慶與其徒。又向衆善募化。灰灌階級。甃包殿牆。棟宇愈見輝煌。宮室益爲聳翠。恢恢乎誠可能謂之大壯而無愧矣。

清代の碑文には、二度の工事が記録されている。

最初の工事は僧源慶と田見龍・胡兆晟等の商人が中心となつて行つたもので、これは康熙四十七年よりから同五十五年の八年間を要する大規模なものであった。その工事の内容に関して同碑文では「其廢而高者以復。舉其頽而墜者以興。廊廡盡爲甃牆。初無一間之弗固。臺基悉爲齊備。又無幾微或虧。畫六十餘間之壁。聖像巍巍。整三座聖殿之儀。金身燦燦。立鐘樓於廟中。居民有靜聽之樂。移僧房於廊外。殿宇無騷擾之憂。」と述べており、明代の工事と同じく、基本的に修復を旨とした作業が中心であつたようである。ここで興味深いのが、「僧坊を廊外に移し」とあり、既に明代に於て一旦外に出された僧坊が再び境内の中に設けられたことが知られるのである。宗教空間に於て「騷擾之憂」が存したため、再び境内の外に僧坊を移設している。また明代に増設された鐘樓は、騷音問題から、塀の上から内側の境内に移設されている。これ以外の施設については言及されていないので、大雄宝殿等の歴史的建築物に大きな改変は無かつたものと解される。

二度目の工事は、同じく僧源慶と、その弟子広徳が中心となって行われたものであり、これは乾隆五年に起工したものであるが、石碑も同年の記とされているので、工期は一年未満の小規模のものであり、その内容も改装程度に留まるものであったと予想される。

これまで、善化寺の歴史を概観してきたが、その寺の歴史は唐の開元寺時代に始まると伝えられるも、その信憑性は疑わしく、歴史的にはつきりしてくるのは、大善恩寺時代からのことである。以後、清代に至るまで、記録されているものについて言うなら、計四回ばかりの復興が繰り返されてきたが、何れも以前の建物を尊重し保存する方向でなされてきたため、現代に於ても遼・金代の建物が残されることになった。また、明代に新たに鐘楼・鼓楼が設けられ、或いは僧坊が境内に設けられたことが予想されるものの、善化寺は大きく山容を損なうことなく今日にまで至っておれば、個々の建築物の歴史的価値ということだけではなく、仏教思想史の立場からすると、寧ろ伽藍構成の保存といった意味からも更に高く評価される必要があると強調しておかねばなるまい。

善化寺の伽藍構成

善化寺に現存する建築物には、山門・東西配殿・三聖殿・普賢閣・大雄宝殿・東西朵殿が有り、この内、南から北に一列に山門・三聖殿・大雄宝殿が並び、その間の東西軸に手前から東西配殿・文殊閣址及び普賢閣が在り、大雄宝殿の東西に東西朵殿が立ち並んでいる。梁思成の作成した総平面図(図1)を見ていただければ、その配置の把握は用意であろう。善化寺はこのように南北軸を中心にして東西に対称的に建物が配されており、中国に於ける伝統的な配置が踏襲されている。

善化寺（山西省大同市）の伽藍構成について

て一層後世の要素が多い⁽⁶⁾としており、その推定される建立時期は一定していない。この建物は山門としての役割を果たすものであるが、正面五間（約二九メートル）奥行二間（約十一メートル）の一種の堂殿であり、そこには四天王像が安置されているため、天王殿とも呼ばれる。梁思成の見解によれば、この塑像は建物よりもずっと新しく、明代以後の作とされている。

山門を通り抜けると、三聖殿に至る。

三聖殿は正面五間（約三三メートル半）、奥行四間（約二十メートル半）の規模を持ち、大雄宝殿に次ぐ主要な建物である。梁思成説では、その建築様式（単層寄棟造・減柱造）から金代の建立とされており、A碑という「前殿」がこれに相当すると考えられている。この梁思成説を受けて村田は「かつては前述の碑文から金初の建

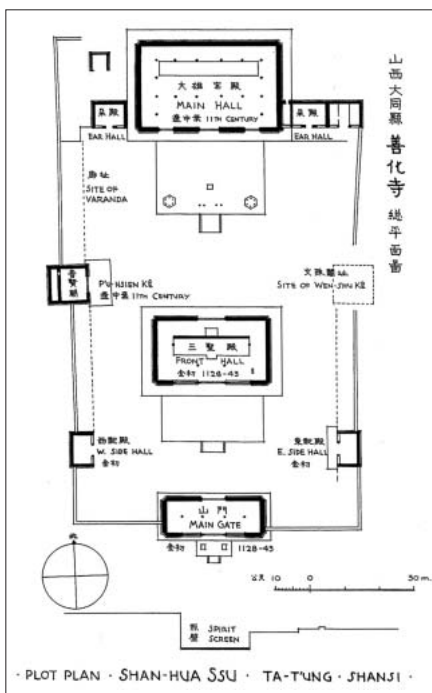


図1 梁思成全集(中国建築工業出版社)所収

ここでは主要な建物について概観してみ
ることにしよう。

善化寺に至ると、その境内に入るには先
ず山門を通らねばならない。

梁思成によれば、この山門の建築様式
（単層寄棟造）は三聖殿と同一系統のもので
あり、金代の再建に際して新築されたもの
と比定している。しかし、村田治郎氏（以
下敬称略）は「細部を見ているとやはり明
代と思われるところがあり、前殿にくらべ

築様式だろうということになっていたが、遼代のとあまり違いすぎるし、朔県崇福寺の弥陀殿すなわち金初の建築とも一致しないので、金代中期から元初へかけての間につくられ、さらに明代に修補を加えたものであろうかと今では考えるに至った⁽⁷⁾。と言う。筆者は建築史に言及すべき専門知識を持ち合わせていないので、建築史学の成果から、早くて金初、遅くとも金代中期から元初にかけて建立されたものと一応に理解しておくことにしたい。この殿内中央には釈迦如来座像一体、その左右に各々一体の脇侍立像（尊格不明）が有り、左右各々の脇侍を隔てて各辺に普賢菩薩・文殊菩薩の座像それぞれ一体が安置されている。このことから、三聖殿の「三聖」とは華嚴三聖を指示するものと解される。殿内の諸像の製作時期等について村田は「内部の仏像もまた建築と年代を同じくするかと思うが、近世の彩色のためにはなはだ卑俗にみえるものの、一面において金初らしい面影も存するので、建築年代とともにさらに考察を一層深める必要がある⁽⁸⁾。」と述べ、結論を保留してはいるものの、村田は山門の四天王像よりもはるかに美術的に評価しており、直ちに金初ということではないにせよ、明代を超えるほど新しいということではないようである。

先に挙げた三碑と「金西京普恩寺重修釋迦如來成道碑」の計四基の碑文も、現在ではここに保存安置されている。

三聖殿を出ると、正面に大雄宝殿が見え、その手前の左右には普賢閣と文殊閣が存する。但しこの内、文殊閣は既に失われており、現在はその台基のみが残されている。

普賢閣は正面三間（十、四メートル）、奥行二間（十、四メートル）ばかりの正方形の重層入母屋造二層楼閣であり、建築様式から遼代の建立と推測されている（梁思成・村田説）。田中淡氏は「普賢閣、三聖殿と天王殿は金代の再建であるが、普賢閣を遼代創建とする説もある⁽⁹⁾」と述べ、普賢閣を遼代とする梁思成説を紹介しなが

ら、金代とする説を示しており、見解が一定していない。上層には白像に座す普賢菩薩像一体とその傍らに天人の立像が存する。梁思成はこれらの尊像を宋代の作風を残すものと評しており、建築とさほど年代的に隔たらないものと解される。

大雄宝殿（単層寄棟造）は正面七間（約四メートル半）、奥行五間（約二六メートル）の規模で、善化寺の最も主要な建築物である。この大雄宝殿については、三氏ともに一致して遼代の創建と認めている。

殿内正面中央には、五間にわたり横一列に各間中央に一体ずつ五仏が祀られている。正面向って右より、東方阿閼仏、南方宝生仏、中央盧舍那仏、西方阿弥陀仏、北方不空成就仏の順で並んでおり、中央にはドーム状の裝飾天井（闘八藻井）が奢られ、中央盧舍那仏は他の四仏と峻別され、最も重要な尊格であることが示唆されている。また先の三聖殿では、この盧舍那仏は「華嚴經」に於けるそれであったが、大雄宝殿では「金剛頂經」、或いは金剛界曼荼羅に於けるそれとして位置づけられており、両者は明確に峻別しておかねばならない。また、両側の壁面には、各辺十二体ずつ護法二十四諸天像が祀られている。これらの諸像を評して、村田は「坐仏像は大きく彫刻技法もすぐれているが、しかし天部諸像の極めて自由奔放な姿態の方が一一層興味深いものがある。これらの諸像そのものおよび配列は上華嚴寺の大雄宝殿と関聯するところが多いが、しかし彫刻の出来栄になると、こちらの方がはるかに上であるのは言うまでもない。」と評し、また「これらの彫刻の年代もまた断定的にはまだいい得ないが、建築より年代が少し遅れて金初に成ったものと考ええる。碑文にも天会六年ないし皇統三年の大重修にあたって塑像をつくったとあるから、金初におけるこの殿修補と同時に、遼末の戦乱にこわされた諸像が根本的につくりかえられたのだろうと私はいいたい。」と諸像の製作年代を推定している。梁思成は、仏像は遼代製作のもので、堂殿と年代が等しいと考えている。但し仏像の内、光背は明代以後に加えられたものだ

する。二十四諸天像は、その造形から明清代の作とは考えられないとするのみで、つまりはそれより以前ということになるであろうが、それ以上のことについては述べていない。

また、この大雄宝殿に東西に連なるようにして、東西朵殿が配されている。西殿には地藏菩薩、東殿には観音菩薩が祀られ、それぞれ地藏殿・観音殿と呼称される。両殿は規模が全く一致しており、何れも正面三間ばかりの小規模な建築である。建築年代は早くとも金代初頭、遅くとも清代以前との推測がなされており（梁思成説）、あまりはつきりしない。

伽藍構成の解説

これまで善化寺の歴史と現状の伽藍について概観してきたが、善化寺の原形が現代に至るまでおおよそ保存されてきたことが了解されることであろう。但し厳密に言えば、善化寺の歴史を、あまりはつきりとしてこない唐代の開元寺にまで遡らず、普恩寺時代に原形を求めるとすると、遼代より残されているものとしては、大雄宝殿と普賢閣を先ず挙げることができ、多少不確かながら大雄宝殿の諸像（五仏及び二十四護法神）も遼代から遠からず製作されており、これらについては先ず原形を完全に留めた状態として見做すことができる。しかし、山門・三聖殿については、古くとも金初、或いは遅くとも明代とのことで、建立年代に幅が残る。各殿の諸像も、山門の四天王像は明代のもので、三聖殿の三聖像は金初の面影を残すと言われ、普賢閣の普賢菩薩像は宋代の作風を指摘されており、製作年代はまちまちである。それでも、先の如く善化寺の歴史を概観してみると、度重なる修復工事の何れもが、大きな改変を望んでおらず、修復を専らとし、肯定的に従来の善化寺の境内を保存しようという指向するものであったと言える。つまり、美術史や建築史の観点からすると、その重修された際の作風に注

善化寺（山西省大同市）の伽藍構成について

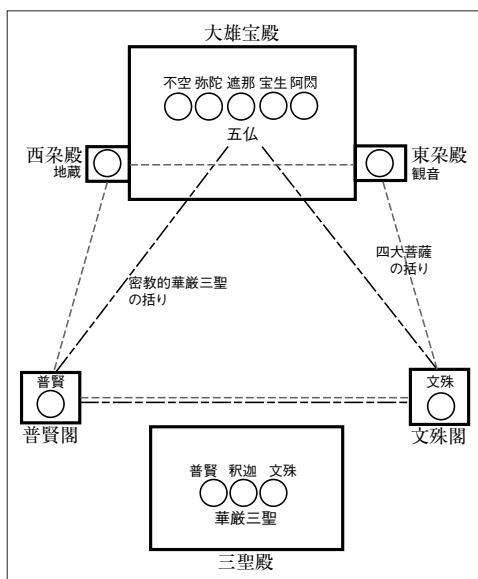


図 2

視し、当時の技術や美意識を解明することに主眼が存するため、これら諸殿・諸像にまちまちな製作年代の考察は極めて重要な事柄だと言えるが、仏教思想史の観点からすれば、堂殿や尊像が如何なる製作年代であっても、堂殿が移動しておらず、尊格が入れ替えられていない限り、その建築様式、或いは美術の様式ということにまで立ち入る必要は余りなく（勿論、思想史として関わりうる密教様式云々という場合には言及せねばならないが）、基本的に善化寺は改変されていないものと想定されるなら、現存する寺の造営結構が遼・金代の仏教思想を窺う端緒となりうるものと考えられてくるのである。

以上のように善化寺を窺うなら、遼代から金代にかけての仏教の動向を窺う上で、善化寺の伽藍は仏教思想史の分野にとつても一級の資料となりうると言えるだろう。

梁思成の作成した平面図を下敷きに、尊像の配置を図示すると図 2 のようになる。

山門の四天王殿は先にも述べた通り、山門の守護神としてとりたてて特徴的だとは言えないので、ここでは特にこれを取り上げることはしない。しかし、他の建物に安置された尊像は、その配置の仕方から善化寺の性格を知る上で重要な手掛かりを示している。

三聖殿に着目すると、そこには華嚴三聖が祀られているのであるから、善化寺は先ずもって華嚴を信奉す

る寺院であることが容易に察することができる。華嚴三聖は先に述べた如く盧舍那仏・普賢菩薩・文殊菩薩のことであるが、これらは「華嚴經」に登場する諸聖の内でも最も重要な尊格であることに疑いは無い。しかし、この三尊を特に三聖と呼称して、他と明確に区分して一つの範疇を設けることは、文献より確認される範囲から言うなら、恐らくは澄観が最初であろうと予想され、澄観系の華嚴の影響を考える必要が有る。実に竺沙雅章氏の研究により一層明瞭になっている通り、遼代の華嚴は澄観の華嚴教学を中心とするものであったことを考えるなら、その影響下でこのような施設を設けることは至極当然のことと言っても宜しいだろう。

三聖殿を北に通じ抜けると、西に普賢閣、東に文殊閣址が見える。文殊閣は既に焼失しているので、その姿を確認することはできないが、普賢閣と一対となつて建てられたものであり、且つ残された台基も普賢閣と同程度の面積を有するものであるから、その姿は普賢閣に相似したものであることは確実であろう。この両者を東西それぞれに振り分ける根拠は、直接「華嚴經」には見受けられず、僅かに『陀羅尼集經』で「金輪佛頂像法。欲畫其像、取淨白疊若淨絹布。闊狹任意、不得截割。於其疊上畫世尊像。身眞金色著赤袈裟、戴七寶冠作通身光、手作母陀羅、結跏趺坐七寶莊嚴蓮華座上。其華座下豎著金輪。其金輪下畫作寶池。遶池四邊作鬱金華。及四天王各隨方立。其下左邊。畫作文殊師利菩薩。身皆白色頂背有光。七寶瓔珞寶冠天衣。種種莊嚴乘於師子。右邊畫作普賢菩薩。莊嚴如前。乘於白象。」⁽¹²⁾と言っている箇所が見当たるだけで、しかしこれも方角が丁度正反対であり、普賢閣と文殊閣の位置を決定する根拠とは見做されない。実際、普賢菩薩は「華嚴經」等に具体的な住処が示されず、『華嚴經疏』で「普賢無方無示表法界普周故」⁽¹⁴⁾と言っているように、特定の住処を持たず遍満する菩薩なのであって、そのような性格から「普賢」と命名されているとのことであるから、積極的に西方に位置づける根拠は見出し難い。しかし、一対の樓閣を建立しようという場合、どうしても具体的に位置を設定しなくてはなら

ない。この場合、それを任意の判断に委ねられたと考えず、華嚴の影響を第一に考えるとするならば、少なくとも、文殊閣を積極的に東に位置づけるべき根拠は、文殊菩薩の住処とされる東方金色世界に求めることができるため、つまり普賢を積極的に西とすることなのではなく、文殊を東としたために、普賢はそれにとまって西に置かれたという可能性を指摘することができる。このことは、文殊は東でなくてはならないかもしれないが、普賢は西でなくとも構わないということであり、寧ろ両者が相對して並ぶという構図があくまで重要だということなのである。

この両者の配置は、例えば澄観の『三聖圓融觀門』に示される、二聖相對をモチーフにしたものであると推測される。この二聖相對とは、そこに「三聖者、本師毘盧遮那如來、普賢文殊二大菩薩是也。大覺應世輔翼塵沙、而華嚴經中、獨標二聖爲上首者、託以表法、不徒然也。【中略】三聖之内二聖爲因、如來爲果。果起言想、且說二因。若悟二因之玄微、則知果海之深妙。」とあるように、普賢菩薩・文殊菩薩の二聖を毘盧遮那仏が果であるのに対して因位に位置づけ、数多ある因行を統収する象徴としているが、澄観は更にこの因位の両者の關係を相對と相融の観点から求めて、前者の立場から二聖が三對の法門（能信所信相對・解行相對・理智相對）を示すというのが、それである。この二性相對を、後者の立場から相融し統一するものが盧舍那仏なのであり、これは善化寺の伽藍構成からいえば、普賢閣・文殊閣の建物の規模を勘案すると、大雄宝殿の盧舍那仏、或いは五仏が担うべきと考えられる。三聖殿にも盧舍那仏は存するが、殿内に文殊菩薩と普賢菩薩が並んで安置されているから、そこで三性の構図は完結しているものと解されるべきであるし、大雄宝殿のそれと較べるに、像の規模からしても全く相応していない。

このように伽藍構成を読み解くなら、三聖殿に於ける三聖と普賢閣・文殊閣・大雄宝殿により構成される三聖

の両者が認められ、善化寺では三聖が二重構造になっていると言えるが、この両者を見比べると、前者が純然たる顕教のそれであるのに対して、後者は密教との融合が計られている点に気付く。また三聖殿は前殿とも呼ばれ、手前で顕教の三聖、更に奥には密教の三聖が示されるといった意図が存したように思われ、且つ建築物の規模からすると、密教との融合形を殊に重視した姿勢が窺われるのである。

東西朵殿と普賢閣・文殊閣を関連づけてみると、そこには四大菩薩という範疇が読み取れる。しかし、四大菩薩との範疇が設けられうるにせよ、地藏菩薩と観音菩薩は普賢菩薩・文殊菩薩と全く均衡していない。建物の規模、或いはその位置からしても、文殊と普賢が特に重視されているようであるし、四大菩薩として等しく扱うことは躊躇われる。仮にそのような関係性が認められても、先の三聖の関係性が常に第一義的なものであり、これについては副次的に過ぎないと言わざるをえない。

まとめ

善化寺は遼代の普恩寺時代からの様子を保存した境内を有しており、そこに華嚴と密教の融合した形を看取することができる。

「華嚴經」と密教との関係は、いち早く『大日經疏』あたりから示唆されているが、本格的な融合の痕跡を文献的に確認できるのは、清涼国師澄観の『華嚴經疏』が最初であろう。先にも述べた如く、遼代から金代にかけて、澄観の系に属す華嚴思想が大いに流行し、善化寺に見られる「密教と融合した華嚴」ということも、その時代の様子を如実に留めているものと解される。密教との融合をすすめた澄観の華嚴教学では、「金剛頂經」と「華嚴經」の融合を指向しつつも、未だ三聖に五仏を持ち込むことは文献に見られないのであり、この辺りに遼

代の華嚴の特徴、いわば更に密教との融合を進めた華嚴の様子を窺うこともできるかもしれない。となれば、重修に従事した圓滿なる僧は「盧舎之教」に通じた者と紹介されていたが、それは純粹な華嚴ということではなく、密教との融合が計られた華嚴を考えなくてはならない。逆から言うなら、仮に密教的な寺院であったとしても、そこに華嚴が介在していないとは単純に言うことはできないということになる。澄観以後にこのような傾向が兆し、遼代あたりに顕著になったとするなら、密教寺院と目されるような場合、例えば地下宮殿の発掘で一躍有名になった法門寺の扱いについても更に慎重になる必要が有るのではないだろうか。

実にこの時代、華嚴と密教の融合を説く論書、例えば道殿の『顯密圓通成佛心要集』や覺苑の『大日經義釋演密鈔』が著されてきたが、このことは単に仏教思想界の言論の範囲というだけのことではなく、実に実際の場面に於てもその動向が如実に反映していたわけである。

また、この五仏は同じ大同市の上華嚴寺にも祀られている。華嚴寺は『遼史』道宗紀に拠れば、遼道宗清寧八年に創建されており、善化寺に現存する大雄宝殿の建立とほぼ同時期に相当するが、華嚴寺に祀られる五仏は明代の作であり、それより以前の様子については知られない。上華嚴寺大雄宝殿南側に安置されている明成化元年「重大華嚴禪寺感應碑記」に拠ると、この五仏の内、木彫の三体は宣德年間に北京で了然禪師により造られたもので、その後、宣德から景泰にかけて資宝禪師により泥塑の二体が増補されたとあり、もとより五仏様式を狙って建立されたものか疑わしくも思われるが、地理的に至近の善化寺に既んじて華嚴と融合した五仏が安置されておれば、予め五仏を建立しようとの意図が存しても不自然ではない。何れにせよ、五仏として安置されているかには、明代に至っても五仏様式が定着していたものとも解されるのであり、この辺りの状況と密教との関係性については改めて考察する必要があるだろう。

註

- (1) 『元史』世祖本紀の「至元二十二年（一二八五）の記事で「是歳、命江浙轉運司通管課程。集諸路僧四万于西京普恩寺、作資戒会七日夜。」と認められるのみである。
- (2) 『東方學報』京都第十冊第四分所収の『大同善化寺石刻錄』（水野清一）を資料として用いた。
- (3) 梁思成全集（中国建筑工業出版社）第二卷 一二五頁
- (4) 同全集第二卷 一〇七頁
- (5) 同全集第二卷 一〇七頁
- (6) 『中国建筑史叢考』仏寺仏塔篇（中央公論美術出版）五四頁
- (7) 村田前掲書 五三頁
- (8) 村田前掲書 五三～五四頁
- (9) 『東洋建築史圖集』日本建築學會編 一五九頁
- (10) 村田前掲書 五二頁～五三頁
- (11) 村田前掲書 五三頁
- (12) 大正藏卷十八 七九〇上・中
- (13) 『陀羅尼集經』では方位について言及していないが、本尊に向って左が文殊、右が普賢であるとしており、善化寺の場合は大雄宝殿に向って左が普賢閣、右が文殊閣であるため、位置が反対となる。
- (14) 大正藏卷三五 九二〇中
- (15) 大正藏卷四五 六七一上
- (16) この時期に『釋摩訶衍論』に註釈が付され、再び注視されていることにも注意を要するだろう。
- (17) 華嚴寺の五仏の台座等を詳細に調査することである程度決することでもきようが、筆者は現時点でこれを検討すべき資料を持ち合わせていない。
- 〈キーワード〉密教、華嚴思想、遼全仏教、善化寺